

## 空に映る海の色

木内 光夫

十数本のマストの向こうに、霧で麓(ふもと)を隠された小さな山が、まるで薄緑色のおにぎりのように並んでいる。いましがた舳先(へさき)を大きく回して避けてきた防波堤の先端を振り返ると、テトラポッドに当たって碎けた波が、濃墨色の空をバックに白い扇と化したかと思うと、一瞬にして消え去った。この海の荒れ様は、発達した低気圧の接近が天気予報官の予想以上に早かったということだろう。

小松は、肌寒さと通り過ぎた沈没の恐怖で、ブルツと身震いをしたあとで、ボートを繋いだロープをもう一度確

認しようと、素足を海水に浸しながらしやがみこんだ。

「おい、ボク、危ないぞ」

愛艇の曲線の先に濡れ鼠になって海を見ている男の子を見つけたのと、声を発したのがほとんど同時だった。男の子は何かに憑(つ)かれたように、両の拳を硬く握り締めて微動だにしない。見れば小学校に入るか入らないかぐらゐの年齢だ。

「どうしたの？ なにか落としたの？ 波が持つて逃げたの？」

小松は男の子に近づきながら声を出し続けた。驚かさないためだ。そんな配慮が必要なくらい彼は、自分だけの世界にいるように見えた。

小松は、ツトに接するときの心得を思い出し、同じ身の丈になるように膝を抱えてかがみ込んだ。急に粒の大きさを増した雨が目の中に飛び込む。とにかく何か聞き出して保護しなければと、そればかりがせかれた。

「どうちゃんか」

「え？」と小松は思わず首をかしげ、耳をそばだてた。

消え入るような声だった。

男の子はハーバーの揺れる海面を指差し、小松の顔を

見た。

「どうちゃんがいるの？」

「パパが溺れたの？ いつ？ 今？ 今日のこと？」  
「ちがう。ずっとまえ」

「そう言う男の子の小さな目が赤い。雨のせいなのか。それとも泣いていたのか。」

「カゼひくとよ、ボク、おうちどこ？ 送って行くから教えて」

小松は自分の言葉に気付かされたように子ども額の（ひたい）に掌を当てた。かなり熱い。

「いけね、肺炎になる」

小松は質問する前にやるべきことがある、と携帯電話を手にした。

「あ、女将、すぐ救急車呼んでくれる、いま港、どこの子か知らないけど雨の中で肺炎になりかけてる、いまから行くから浴衣と、それから毛布、ハイ、よろしくー」

そして、電源を切るのもどかしく、さ、ボク、お医者さんへ行くよ」と言うやいなや小松は、子どもを抱きかかえると、松並木の先にある定宿『おのね(潮の音)』目指して走り出した。

男の子は何の抵抗もなかった。

「後つでまた波が砕け散る音がした。」

曇天の日は空と海がつながり、水平線が溶けてしまうというのは嘘だ。現実には目の前の海は、晴れた日以上の明確さで二つの世界を分けている。遠い、遠い、遥か彼方の明るい空がそうさせているのであろう。

滞在が四日目に入った。

肺炎騒ぎは幸い空振りに終わり、南部救急病院での注射一本で男の子の熱は引いた。

あの日……

「報告を聞いて駆けつけた母親の私に対する態度はひどかった。」

「こんな小さい子を、体の弱い子を、連れまわしてさぶぬれにして、あなた恥ずかしくないの、立派な誘拐よ、これは。わたし黙ってませんからね」

端正な顔からは想像もつかない激しい言葉の数々が、今も耳に残っている。

小児科の井上という医師が見かねてか、相変わらずの大バカもんがあ、人を見てものを言え」と彼女を怒鳴りつけた。

相変わらずの」という言葉からして、医師は母親をよく知っているらしい。

付き添って病院にいた宿の女将も、医師の言葉を引き継いで、負けず劣らず凄かった。

ほんとにバカ言つてんじゃないよ、こんなご時世、道端で人が倒れてたつて知らん顔する人が多いのに、見ず知らずの子どもを担いで雨ん中走つて、病院まで付き添つて、オロオロ心配して、こんないい人に向かつていまのはなんだいい。そんなに大事な息子なら首に縄付けて柱にでもつないでぎな」

小松は、母親、井上医師、おのねの女将、男の子、それぞれの顔を思い出して頬を緩めた。大人たちが言い争う姿と、そのすぐそばでササヤと眠っていた男の子の穏やかな顔のアンバランスがなんともおかしかったのだ。それに輪をかけて、母親に非難されてすみません」と頭を掻かいた自分自身の姿が…。

誘拐犯か。なつてもいいかな」

そう思わせる魅力が、傍かたわらで海を見ているこの男の子にはある。

おじさん」

急に男の子が呼びかけてきた。

うん？」

おソラのいろがうつつてるのウミだけだよね」

ボク、それは反対だ。海の色が空に映つてるんだ」

うそだよ」

空より海の方が偉いんだ。その証拠には、空には魚がないだろ。大将が家来に色をつけてやつてるつてところかな、ウン」

でもおソラにはトリがいるよ」

海にだつて鳥はいるさ、ほらあそこ」と小松は沖のカモエを指差した。

あの波乗りしている白のはな一んだ？」

トリ」

ほらね、海の方が偉い」

でもね、ママのほうにいつてもおソラはあるけど、みどりいろはおソラにうつつてないよ」

そうきたか。うん、そうそう、山と空だと空の方が偉い」

でも、おソラがあおいときでもヤマはみどりいろだよ」

あつと」

「んなの」

こんな小さい子に負けていれば世話はない、と小松は唇を尖とがらせた。同時に可笑おかしさと楽しさが同時に湧いてきた。

おじさん、おじごとは？」

仕事のことを聞かれたのは意外だが、別に深い意味は無いのに違いない。そこでハタと気が付いた。学校はどうなっているのだろうか。病院ではたしか六歳十ヶ月といつていた。年齢に達している。インフルエンザ休校が起きる季節でもないし、春、夏、冬の学期末休みでもない。しかもこの子とかかわつた四日間ともウィークデイなのだ。

ボク、学校は？ 一年生だよ」

ボク、カイト。なま・ま・え」

きちんと名前でも呼んで、との抗議らしい。

「ごめん。そういえば病院で名前聞いてた、先生から。海の人つて漢字で書いて、海人くん。あの先生、掛かりつけ

のお医者さんだったんだね」

かかりつけって？」

うーん、いつも診てもらっているお医者さん」

そんならシユジイだよ。かあちゃんがそういつてたもん」

またやられた、と小松は、右中指でまた、自分のこめかみを搔いた。

おこか体が悪いの？」

何か病気が原因で登校していないのかもしれない、と小松はようやく理由らしきものに辿(たどり)り着いた。

むねがよわいんだって、ボク」

そうか、それでよく熱が出るんだな」

ほんとはね」

うん」

「ここにきちやいけないんだ、ボク。おうちでアンセイにしてない」と

ママはどうしてる？ いま、この時間、おうちにいる？」

おじごと。ひもの、つくつてるんだ、じいちゃんちで」

それで、なぜおじさんは おじごと」していないのか、と聞いてきたのだ。

そうか、誰もいないからおうちを抜け出してくるんだ」

うん、とうちゃんにあえるかもしれないし」

そう言うと海人は、出会った日のように、また拳を固めて海面を見つめ出した。息を止めて、苦しさを共にしなければ、父親が海の底から、生きて浮かび上がってくる、と信じている。そんな感じだ。

小松は胸が詰まった。

海人の父親は浜でも有名な泳ぎの名手だったという。近くの海水浴場では、毎年のように人命を救助し、自宅の鴨居の上は感謝状と表彰状でギッシリだと女将に聞いた。その泳ぎ自慢が命取りになった。夏祭りで浴びるほど酒を飲んだ後で彼は、可愛くて仕方が無い海人にせがまれ、誰もいないハーバーに遊びに来た。海人が水際で遊んでいるのを見守るはずが、日光を全身に浴びていつしか酔いが回り、防波堤の上で眠りこけたらしい。このときの親子の位置関係は、たまたま入ってきたヨットのオーナーが海上から確認している。海人が過(あ)やまつて足をすべらせ、それを見たオーナーが大声を上げた。父親はその声で目を覚まし、海人を助けるべく防波堤から着衣のまま海の中に飛び込んだ。海人は溺れたわけではなく、舟の引き綱につかまつて自力で安全な場所に戻ったが、

父親は心臓麻痺で帰らぬ人となった。一年前のことだという。

『おのね』の女将は言った。

熱を出すから駄目だつて、この間の井上先生に何べん注意されても海につれていきましてね。潮の香りで海人の体を強くするんだつてききませんでした。それはそれは子煩悩でしたね。産婦人科の先生に、この子は長くもたないなんて言われたものだから、必死で可愛がつていたのかもしれない」

きつと帰ってくるよ」と小松は、海人の頭を撫でた。

うん」

誰がとか、何処からとか、聞き返してはこなかった。

まだ残っていたであろう海人と自分との間の心の隔たりが、一気に縮んだような気がした。

宿の板長自慢の海鮮料理を堪能した後で小松は、三階にある客室から夜の海を見ていた。

虫が入るといけませんから障子だけでも閉めましょうと言う仲居に、気遣いに対するお礼は言ったものの、

開け放つたままにしてもらい、海の香りを心ゆくまで愉  
しんだ。

耳を澄ませば、小さな潮騒も聞こえてくる。

沖の遙か遠くの方で海を揺らしている誰かがいる。波が  
浜に押し寄せてくるのはそのせいなんだ」

小松は、心の中で創った台詞を声に出してから、一人  
合点でうなずいた。

「よし、こんど海人に会ったらこれを使おう」

もう少し砕いた言い方でないと大人向きに過ぎるとも  
思い、首をかしげた。

波子さんか……」

「思いがあちこちに飛ぶ。

誤解がとけた後で、海人の母親が手をついて謝った。

そのときの所作の一部始終がよみがえってきた。

髪を後つで無造作に束ね、眉も整えず、化粧皆無の  
顔で彼女は、すみません」ではなく、子どものように  
「めんなさい」と言った。顔をあげた後、右手の甲で右  
目をこすり、ついで小さく水洩みずっぱなをすすった。  
見る間に両の目が潤い、涙があふれ出て頬を伝い、顎あ

ごから滴したたり落ちた。痣あざのついた膝小僧が  
二つ、スカートから飛び出している。腿ふとももに置い  
た手でしきりにスカートを握り締めるからだ。その指の  
ほとんどが、救急絆創膏で白く覆われていた。

小松はそんな波子を、掛け値なしにきれいだと思っ  
た。

わたし、あの子が死んだら、何て謝ったらいいか」

亡き夫の、今このときの思いが伝わってくる言葉だ。

透き通った涙が、いつまでも波子の顔を洗い浄きよめ  
ている。濡れた睫まつげの奥の瞳が、沈むように黯く  
る。

小松は、見たこともなく、この世にもいない男に、理不  
尽ともいへべき嫉妬(しつと)を感じた。

「ぼっちゃん」

後ろから来た女将の声で、小松は我に返った。

常務さんからお電話です。そのままお部屋の電話でど  
うぞ」

すみません、三井は、ケータイにかけるのが嫌いで」

おふつ、それなら実は私も。ときどき、プツンときれた

りして、相手に気をつかいますし」

女将が笑顔を作つて肩をすぼめた。

はい、小松です」と、部屋の襖(ふすま)が閉まるのを見届けてから、受話器を手にした。

小松の父親、忠興(ただおき)が逝去して次期社長候補が乱立したという。三井によれば、その中でも田嶋専務は急激に派閥を拡大し、社長の世襲制を非難して、ついには決起集会まで開いたという。小松はどろどろした権力闘争の話聞いて嫌気がさし、体(てい)のいい放浪生活に終止符を打つて、父親が愛してやまなかつた海辺の定宿(ちやうじやく)『おのね』に、一人籠(かご)もりに来た。

それでも追つてくる社長就任要請という名の強迫。

三井専務、ぼくは器(け)じやないし、好きな絵を描いて、もの静かに生きていきたいんです。分つてもらえませんか。経営は大勢の人の生活や人生を預かる難(がた)しい仕事、社長の長男(ながお)というだけで担(た)げるはずがないでしょう。第一僕(ぼく)は精密機械(せいみつけい)について何も知りません」

電話の向(むか)ひの専務の言い分は、こうだ。専務派の横行も、元社長派の迷(まよ)いも、その他諸々のゴタゴタも、世襲(せしやく)で社長が決まれば一瞬(いつしゆん)になくなる。混乱(こんらん)といつても所

詮(せん)その程度(ていど)のもの。社員みんなのためと云(い)うのなら絶対に就任(じゆにん)しなくてはならない。また経営実務(けいぎやうじつむ)は、自分をはじめ亡(な)き社長恩顧(おんこ)の者(もの)たちが必死(ひつし)で行(い)い、新社長には絶対迷惑(めいわく)はかけない。

専務からの電話で心を乱(みだ)された小松は、女将を部屋に呼び戻(かへ)して、いつものとりとめのない会話を始めた。

ぼつちゃんの絵、すてきですものね、なにかこうホンワカして、見る人の心(こゝろ)の中からあらゆるわだかまりを取つてしまふような」

いま描(か)いている油絵(あぶらゑ)のモチーフが向日葵(ひまわり)なのに、バックの空(そら)が黄色(きせう)で、花(はな)の方が、濃(こ)さの違(ちが)う空色(そらいろ)だと話(わ)すと、女将(にやう)が両(りやう)の掌(てのひら)を重ね(かさね)て言(い)った。

女将、それ、褒(ほ)めすぎ」

いえ、お父(ちち)さまも、あれは使(つか)い物(もの)にならん、あらご免(ごめん)なさい」

小松(こまつ)は笑(わ)つて話(わ)の先(まへ)を促(うなが)した。

口(くち)ではそうおつしやつていましたが、このお部屋(へや)で坊(ぼく)ちゃんの絵(ゑ)を見(み)ながら、ニコニコしてお酒(さけ)を召(ま)し上が(あ)つてましたよ。わたしなんか、こんなこと申し上げ(あ)げちゃ何(なに)ですけど、お父(ちち)さまが生(な)きていらしたら、会社(かいしゃ)の経営(けいぎやう)みたい

なものに、坊ちゃんを巻き込まないんじゃないでしょうか」

会社の経営みたいなもの、か」と小さく声に出して小松は、コクリとうなずいた。

女将、会社の話じゃなくて、そう、たとえば波子さんの話

あららら、あんなに毒づかれたのには？」と女将が口を押さえて笑った。

なぜスッピンなんです？ 元があれだけいいのに」

女将の顔から笑みが消えた。

怒らないでくださいね」

ええ、もちろん」

坊ちゃん、肉体労働でお金稼いだことあります？」

虚をつかれた感じだが、小松は誠実に記憶をたどった。

ありま、せんね」

あの日の波子さんの格好から、顔や髪を含めてですけど、必死な生活とか肉体労働を連想しない人の方が珍しいんですよ。忠洋(ただひろ)さんはやっぱりお坊ちゃま。彼女は化粧しないんじゃないかと、する余裕がないんです、精神的にも、経済的にも」

それは決して小松をバカにした口調ではなかった。浮世離れた感覚の三十男を、どこかで羨ましく思っている。そんな感じだ。

どうせ額の汗で崩れるからと初めから化粧をしない女爪にアートするなんて夢物語で、爪といえは貧しさのたとえそのままに火をともしただけ、そんな女もたくさんいるんですよ、坊ちゃん。波子さんもその一人」

小松は、母親に諭(さと)されていような快感を覚えた。耳に優しいのだ。

あらご免なさい、生憎(な)なことを」

いえ、ありがとうございます」

女将は、なぜか瞬きを繰り返して、急に思い出したというように、お盆(ひら)の上のビールを手にした。

きょうは漁(いさ)り火が見えませぬえ」

小松はそれには応えず、コップの中で暴れまわるビールの泡を見つめながら、夜の海は、減色(げんしき)混合(くわごう)ですね。昼間の色という色をみんな混ぜてしまつて、個性を失いつくした黒(くろ)と、真面目な顔でつぶやいた。

坊ちゃん……」

はい？」



潮風がフツと二人の間を通り過ぎた。

ほんとに変な人ですね」

それつて、ほめ言葉ですよね？」

はい」

女将が文字通りこころと笑った。

何々丸と漁船の名前をそのまま看板にしたひもの屋が、国道の両側に蜿蜒(えんえん)と続いている。

小松はタクシーの運転手に、長いトンネルの手前で左折するように言った。漁港の周りの集落に通じるはずだ。

「遠いご親戚かなにかをお捜しで？」と、停めさせた場所、釣銭を出しながら、運転手が微笑した。

停車場所を、小松が再三再四迷っていたからだろう。

「たしかに遠いな」と笑顔を創つたあとで、お釣りは収めておいてください。それとこれはお願いなんです、三十分ほどしたら、ここに帰ってきてくれませんか。いえ、もしそのとき貸送中でしたら、空車になったそのときでけっこうですから」と頭を下げた。

「はあ……」と訝いぶかしげに小松の顔を見詰めた彼は、でもねえ、来たとしてお客さんが待つてるって保証はないし……」と、わざとらしい溜め息をついた。

「これはうかつでした。ではこういうことで」

小松は、財布から五千円札を出して運転手に押し付けた。ここでずっと待たせたとしても充分な金額だ。

わかりました。必ず」と彼は、相好(そうこう)を崩した。

波子がこの辺りに住んでいたたり、彼女の祖父の作業場があつたりする可能性は、ほとんど無い。ひもの、漁港、集落、海岸の四つをキーワードに、自分なりに地図で探し、あたりをつけて訪ねてきたのだ。別に波子そのものが目的なのではない。なぜなら、もしこの旭町が波子の住所地なら海人は、二キロ以上も一人で歩いて、いつものヨットハーバーに来ていたことになるが、それはありえないからだ。ただ、波子が吸っているのと同じ、魚の匂いを連れた潮風の中に立ちたかった。それだけのこと……。

心懐(こころな)かしい下町の路地。そんな感じがした。二、三メートルほどの狭い道を挟んで、小さな間口のしもた屋(や)が軒(のき)を連ねている。それぞれの家がわずかばかりの

緑を、それでも精一杯可愛がつている。たくさんある、どの路地の先端にも、判で捺おしたように、灰白色の防波堤と青い海があった。

民家そのままの八百屋には、飾り気の無い、とれたての野菜がていねいに並べられ、あること自体が不思議に思える小さなガソリンスタンドには、縄が張られ、本日定休の札がゆらゆらと揺れていた。軽自動車だけを標的にした小さな貸し駐車場。山腹から道路まで一気に降りてきている墓地。バイクの郵便配達人が、路地から出てくる度に小松をチラチラと見る。そのいずれもが、のどかすぎる「景色」だ。

約束の二十分は瞬く間に過ぎた。

直射日光を浴びながら小松は、アスファルトの上で、タクシーをひたすら待った。路線バスが時を違たがえて二台、小松の前をのそのそと通り過ぎて行つた。

約束したから』

小松は焦(こ)れて路線バスに乗るよりも、待つことで、そのことを大事にしたかった。

通りすがりの肥った猫が、小松の前で足を止め、そのくせ顔は背けたままで、ニヤーと鳴いた。

ヨットハーバーと言っても実際は、地元の釣り船や小さな漁船が同居している小規模なものだ。外海から港を護る防波堤も、魚が連なつて泳いでいる。ペイント画がついていて、ハーバー全体が子供じみた雰囲気だ。碇泊(いかり)しているヨットの名前からして童話的で、ピノキオ、マーメイド、ピーター・パン、ガリバー□などなど。そういえば、近くに地元高校ヨット部の倉庫もあった。これもまた、外壁に恥ずかしいほど大きくその旨記(めいぎ)する丸うに擁壁(ようへき)よう(き)に立てかけられた色とりどりのボート。小型漁船を引き上げるための勾配(こうばい)五(ご)パーセント程度のスロープに、一定間隔で続く、摩擦(ま)擦(さ)よけの丸太が描く抽象画。

父親(ちち)がこよなく愛した海(うみ)の一面を、小松もまた愛し始(は)めている。

…海人がそこにおいて、海と遊んでゐるから。

…その海人を産んだ母親(はは)が、あの波子(なみ)だから。

真上(まじやう)から照りつける太陽(たいやう)で、頭(かぶ)と肩(かた)が熱(あつ)い。コンクリー(コンクリート)のスロープを波(なみ)が熱(あつ)がりながら登(のぼ)つてくる。戻(かへ)るとき

にいくつもの輪を作り、その輪の影が白く揺れて輝く。

影が黒いなんて誰が決めたんだ。分つてるさ、そいつはきつと海を知らないんだ」

小松は詩人になりきつて、両手を広げ、声を張り上げた。

ああ、海の水が光の力をかりて、舟によじ登ろうとしている。ゆらゆらと、半ば、ためらいながら」

小松には、ヨットの船体に反射する光の輪が、海水の分身のように見えた。

おじちゃん」

ん？」と小松は、海人の声がした方へと向き直った。

かあちゃんだよ」と海人は、胸を張つて指差した。

小松は一瞬、息を呑んだ。

この前の波子とはまるで別人の女」が、少し固い表情を見せながら近寄ってくる。

ていねいにすし梳かれて光沢が出ているストレートな長い髪。優しく細く弧を描く肩。地肌の小麦色が残るひかえめな化粧に、オレンジの口紅。ちよこんと頭にのせたおしゃれな表わら風の帽子。ノースリーブのワンピースは白地に、大輪のヒマワリの花だ。

その全てが自分との再会に向けられたものだとしたら。

小松は、波子がそのために費やした時間を思い、小さな感動をおぼえた。

先日は失礼しました」  
帽子をとるときに、髪がファサツと揺れた。

そこはレストランと言うよりむしろ展望室に近かった。

ハーバーから距離にして五キロ隔たり、標高にして二百メートルほど上にある絵本美術館から見下ろす海は、深い緑色の器の端に盛られた、真っ青な果実のように丸かった。水平線の先にたまたま白い雲の帯があり、海の青と空の青とは繋がつてはいないが、その辺りを除けば、どちらがどちらを映しているのか分らないほど、同じ種類の青だった。

それでも海の方が勝ちだ。

小松の中でそのことは動かない。

海人は美術館内のレストランに入るとすぐに出窓の側に陣取り、ウエイトレスが来ても、波子が注文した。フエが来ても全く見向きもせず、ひたすらパノラマを楽しんでいる。

誰といらしたんですか、ニコニコ」

不躰ぶしつけとは思ったが、小松は聞かすにはいられなかつた。

海人の父親です。彼、別に絵や本が好きと言うわけではないんです、高いところが好きだっただけで」と波子は微笑した。

笑うと右側にだけ笑窪(えくぼ)ができる。それも、ほんの小さな。

「どんな人だったのかな」

「ごく普通の、呑ん兵衛。お祭りと海が好き、どちらかと言えば乱暴者、それと、女好きの」

それでも愛した……」

「いえ、そういう人だから一緒に暮らせるって思ったんです。温あたたかければ、ほかに何もいらなかつたし。男の人からいろいろ望まれるのって辛いじゃないですか、わたし、何にもない女だし」

何かあるかないかは、当の本人以外の方が、決めるんじゃないかな」

「じゃ言ってください。わたしにあるもの」

波子の瞳が一回り大きくなった。

小松は重いひとことを言ってしまうようで口ごもつた。やっぱりね、いいんです」

波子は小松の沈黙を悪い意味にとつた。

「そうじゃなくつて、僕、会つたばかりなのに軽率なことを言いそう、それで」

「軽率なことつて？」

「ざつと想つていました、あの病院での出会いから、あなたのこと、みたいな」

背中から汗がドツと噴き出した。

「それが軽率……」

「いや、何言つてるんだろ」

「海人、行きましょ」と波子は急に席を立て、言った。

「こんなところへ誘つてごめんなさいね。そうね、心のどこかで何かを期待してたんだわ、こんなお化粧なんかして笑つてください。港の近くのレストランや喫茶店はこわかつたんです、噂になりそうで。子持ちの未亡人がいい年をしてつて。そういう田舎なんです、この辺。バカな女です、わたし」

「何か言わなければ終わつてしまふ。」

「噂になりたいつて、言つたら？」

海人！。フエはいいの、下で買つてあげるから」

海人がかぶりを振つてイヤイヤをした。そのあとで、  
「あちゃんが悪い」とばかりに波子をならみつけた。

「お付き合ひしてくださいって言ったら？」

小松は自分もどかしかった。どこかで理性がブレーキをかけている。仮定型でしかものを言っていないのだ。その小ずるさに、自分自身に吐き気がした。

本気で言つてくれたら考えます。失礼します」

海人は波子に手を引かれながらも、何度も振り返り、  
「すがるような目で小松を見た。

「おまたせしました」と、コーヒーがテーブルの上に二つ置かれた。

「きみ、一緒に飲む？」

小松はヤケになつて、ジョークを飛ばした。

本気で言つてくれたら考えます」

若いウエイトレスは波子と同じ台詞を吐いて微笑をした。  
「た。」

耐圧ガラスの向こうの、遠くの海が、いつそう遠ざかったように思えた。

「考えます、か」

可能性は残つていることになる……。

あの、お客様」

ふと気がつくとき、支配人風の男性が立つていた。

待たせていたタクシーは、お連れの方が乗つていきました。よろしければお客様のために、別のタクシーを呼びますが」

確かに歩いて定宿に戻れるという距離ではない。言葉の齟齬(そご)も、心の行き違いはともかく、なぜ、一緒に帰らなかつたのだろう。まったく間が抜けている。

小松は自嘲した。

「ありがとうございます。呼んでください、浜の ちおのね」という旅館までと言つてもらえれば」

陸に引き上げられた漁船の甲板でポーっとしているところへ、紙切れを握り締めて来た海人が、それを表彰状のようにかざし、  
「かあちゃんからおじさんに」と言つた。

受け取ると海人は、嬉しそうに笑つて船のそばから離れ、  
「江(みぎわ)に降りていった。」

小松が船から飛び降りて、ゆつくりとそれを追う。  
紙切れの中身は意外にもポエムだった。

## 『海』

波子

海人は海に入りたい  
たぶん。パ。パ。が。そこにいるから

海人は海に入れない  
きつともう。パ。はいないから

わたしは海に入れない  
浜で海人がいきているから

わたしは海に入りたい  
ひとりぼっちが つらいから

「左手いもんだな」と小松は、後頭部に両の掌を当てて  
まばゆい空を見上げた。

小松は海人を一度、父親の忠興が遺のこしてくれたフ  
イッシングボートに乗せようとしたことがある。沖に連  
れて行つてやろうと思つたのである。ところが海人は足  
を踏ん張り、つないだ手を引き解こうとして頑張つた。  
小さな唇を噛み、眉根を寄せて、必死で拒もうとする  
のだ。

波子のポエムは、期せずしてあの日の海人の行動の意味  
を教えている。

「親はすごいな」

小松は、息子の本質を見抜いていた忠興と、母としての  
観察眼が鋭い波子に、畏敬という共通のものを感した。

海人が小松に駆け寄り、ジャージの端を引いた。

「ねえ、キラキラ、すごいよ」

指差す方を見ると、ユラユラと揺れる水面に日光が乱  
反射をしている。

海人、あのキラキラしているところを見ながら目を細  
くして「らん。そう、もうちよつとで目をつむるつてと」  
ろまで」

そう言いながら小松は、自分も目を細めた。

一つ一つの輝きの真ん中から、光の筋が空に向かって

立ち上がる。それは逆に、太陽の光線が水面に向かつてふりそそぎ、さらには突き抜けて、海水の下の砂に刺さっているようにも見える。

「うわーっ、きれい」

「そうそう、海人のころと一緒だ」

「ねえ、このキラキラふんでいい？」

驚いた。海人が裸足になって海水の中に足を踏み入れたのだ。海に対する潜在的恐怖、確か、それがあつたはずなのだが。

小松はボエムをポケットに仕舞うと、臆すねまでシャージをまくつて、海人に倣(なら)った。

光の精たちの向こうには、フジツボを身にまとつた深緑色の石が庭石のように並んでいる。名前も知らない背の低い海藻が、右に左に揺れて微細な砂を舞い上げる。海人が小松を見上げる顔が明るく光る。

『とりぼちじゃないよ、波子さん』

海人がいる。その海人より少しだけおとなの自分がいる。小松は、チャプチャプと水音をたてて足踏みをしなから、自分を励ますように何度もうなずいた。

小さな波が沖からやってきて、波頭の白さがようやく崩れると、今度は砂浜をすべるようにして小松に近づいてくる。

小松は、宿での夕食の後、浴衣姿で一人、松並木の東側にある砂浜にやってきた。三井常務がもうすぐ、社長不就任の最終確認」という役目を果たすため、携帯電話に連絡を寄越す。小松は、父親が愛した宿の中で回答することは避けたかった。生活できるかどうかはわからないが、齡三十七、残る半生をひたすら絵を描いて生きようと決めたからだ。心のどこかで、父親に謝罪をしている。

今朝、ハーバーでのことだ。

海人くん、舟はなぜ沈まないか知ってるかい？」

「うん、木でできてるから」

「おじさんは違うと思うなあ、海に嫌われていないからさ」

「え？ じゃあ、とうちゃん、海にきらわれてたんだ」  
たった一言で小松は、海を、心の狭い嫌な奴にしてしま

ったことを悔いた。

海人は、たふたふとうねる海を睨みつけていた。

「ごめんな、海人。すみません、海人のお父さん」

夜の海が小松の爪先を洗って戻っていった。

想いが勝手に動く。

「なんだ、女将だったんですか、あの日の波子さんのスタ  
イリストは」

「あら、ご迷惑でした？」

「いえ、とんでもない。とてもきれいでした、彼女」

「それで向日葵の柄だったのだ。」

「いつもお嫁さんにしたいほど？」

「女将が覗き込むように言った。」

「ええ」

「それで、坊ちゃん、言ったんですか、ちゃんと好きです」

「っ」

「いや、ためらいが勝ちました。だめですね、僕って」

「そう、ためらったの？ じゃ、本気なんだ、坊ちゃん」

「え？」

小松は首をすくめて笑った。遊び目的の男は肝心なと  
きにためらったりはしない、という女将の言葉を思い出  
したので。

横になると、浴衣を通して昼間の砂浜の温もりが伝わ  
ってきた。

目の上に黒く見える松の枝葉。その彼方に濃藍の空。  
星が一つ二つ……。

目を閉じると、波子の白いワンピースの柄、ひまわりが  
目蓋のスクリーンいっぱい広がった。

「あしたも晴れる。そしたら海人と波子さんを釣りに誘  
おう」

舟の上から手を差し伸べたら、二人のうちどつちが先  
に手を出してくれるだろう。

「いや、どつちの手が先であつて欲しいのかな。」

「小松はそんなことを考えながら、口元をほころばせ  
た。」

「えっ、現在の社長は貴方……二井常務？ じゃあ、次期  
社長の人選で混乱して、あれは何？」と小松は、海辺で大声



を挙げた。

社長の遺言で、いいですか、坊ちゃん。死後すぐに代表取締役になるのは私、三井と決まっていたんです」

「そーかあ、いや、おめでとう」

それなら何の迷いも問題も無いではないか。

いや、そうではなくて、参りましたな。遺言といつても、坊ちゃんはすぐには社長就任を承知しないはずと踏んだ社長が、深慮遠謀で社内向けに認めたためたものとしてね、その、つまり私の社長の椅子の期限は六ヶ月なんです」

その期限があと一と月で切れると、三井は電話の向こうで、ため息混じりで言い放った。そうでなければ、なぜ専務派が社長の座を狙って蠢(うごめ)くのか、と。

とにかく、あと二十日以内に、旗幟(しし)を鮮明にして欲しいと、三井は譲らない。

すでに就任しないことを明らかにしていると言うと、電話が変で聞こえませんでした」と、とぼける。このあたりなかなか老獪(ろうかい)だ。

坊ちゃん」と、さらに三井は、追い討ちをかけてきた。当社の株式ですが、坊ちゃんが社長から相続したもの

は、当然発行済み株式総数の過半数を占めています。これを一体どうなさるおつもりですか。坊ちゃんはすでに亡き社長の包括承継人になっています。配当だけ受けて、あとは知ったことかと、そういうことでしょうか」

待って」と小松は、目の前に三井がいるようなつもりで、右掌を突き出して制した。

株式を自分に譲渡しろということなのか…。そうとも解せる。自分は初めから社長にならないと言っている。それでも全株式の過半数を手中に収めない限り、三井の基盤は脆弱(ぜいじやく)でしか無い。それくらいは世間に暗い自分でも分かる。

過半数を占めているということは、僕の意向で、つまり僕の議決権行使如何で、暫定でない社長が正式に決まるということだよな」

え、ええ。そうなります」と、三井の声が少しだけ震えた。

「さつき、社内向けの遺言といったよね、そうすると田嶋専務も内容を知っている…」

潮風が、たぶん東京に届いている。二人の沈黙が、それを可能にしているはずだ。

「三井常務」と、小松は凜とした声で言った。

「はい」と、消え入るような声が聞こえた。

田嶋専務が世襲反対を唱えて集会を開いた云々はあなたの嘘だね。彼は決定権者たる僕に真正面から嫌がらせをするなどという馬鹿ではない。相続した株式の多寡、比率を知らなかった僕は、馬鹿だけど……」

策士、策に溺れるとはまさに三井のことだ。

坊ちゃん、誤解しないでください。」

「三井常務いや、三井社長、明日田嶋専務を同道して『おのね』に来なさい。一泊するつもりでね。否やは許さない。」

小松は現オーナーとして、命令口調で言った。自分で顔が引き締まるのが分かった。

「はい、おっしゃるとおりにいたします」と、耳を劈つんざくような大声が返ってきた。

この日小松は、女将に接待役を演じてくれるように頼んだ。第三者的な立場で、小松自身を含めた三人の人間の、本音の部分を探って欲しいからだ。

女将は、さも嬉しそうにこの大役を引き受けた。

「三井さん、田嶋さんの本音はどうでもいいんです。たぶん見え見えでしようし。それよりわたしは坊ちゃんの本音を探りたい」と言う。

呉越同舟とはこのことかと小松は、苦笑いをした。

同じ会社の社長と専務が、目を背け、固まったまま鎮座している。

宴席は、『おのね』の最上階にあり、故忠興が仕事の話をするのは無粋だがやむを得ない」と言つて、緊急時に限つて使つていた個室だ。二十畳の和室の奥に十畳の次の間があり、その戸襖とぶすまを開けると、国道を隔てた幹から張り出した松の枝が目の前にまで迫っている。そのお陰で、行き交う車両や人は全く見えず、針葉の束の先に一色の海が広がっているだけだ。

小松は、自分の大名膳だいまようぜんを上座に置かせた。趣味や常日頃の好みには反するが、今回は敢えてそうした。

女将はと見れば、京都の間屋から生地を直接仕入れて仕立てたという、取つて置ききの和服で、いつもよりかなり念入りの化粧をしている。

忠洋さんは就任なさらない、というのは本当ですか」と、型通りの挨拶が済んだ後で、田嶋が大上段から切り込んできた。白髪だが年齢はまだ五十、その瘦身からは想像もできないほどの大声を出す。まっすぐな背骨が絵的にも優れている男だ。

社長にはならない、絵を描いて暮らしていくと、何度も何度も三井に伝えている。」

いつもなら、三井さんと言うところだが、この席では呼び捨てにすると決めてる。

「この話をする時、急に三井の耳が遠くなるけどね」

小松はわざと三井を覗き込むようにして微笑した。

三井は小さく頸ぐびをすくめた。

小松は、聞きたいことは一つで短い前置きをした後で、専務の目を見据え、

田嶋は社長就任を要請されたら快諾？ それとも固辞？……その中間は認めないから確答して」と言った。

三井がこれ以上はないというほど目を刺むいた。

その瞬間を待つていたように女将が酌をする。

はい快諾です。一端(いっぽ)のサラリーマンなら、いつか自分の手で経営をしてみたいと思うはず。その気概が

ない男は、平社員としても使い物になりません。もつとも私の持ち株は数パーセントですから話にもなりません」

意を決したらしい田嶋が本音を晒した。

専務、だからこうして坊ちゃん、いや、忠洋さんに決断をと、こんなところまで……」

小松は一瞬だが、目元を痙攣けいれんさせた。父忠興が愛したこの地この宿を「こんなところ」と称したのだ。

三井は今回の話合いが自分に有利に運んだとしても、

『おのね』には泊まっては行かないだろう。小松はそう確信した。

決断はしたと言っている、ずっと前から。三井には今の質問は要らないよね、快諾に決まっている。三井は要するに、私の持ち株を誰のために使うのか決断をと、そう迫っているわけだ。現在の、というか、暫定的な代表取締役としての立場もあつて」

はい、六ヶ月の間という遺言の内容が登記されているわけではありませんが、亡き社長恩顧の者ならば、できるだけその遺志を守ろうとするのは当然ですから」

心の中に仕舞い込んだ本音というのは、心の耳さえあ

れば聞こえてくるものだ。一旦就任すれば遺言の内容如何にかかわらず、二年の任期いっぱい居座れる。その腹中が見事に透けて見える発言ではないか。遺族すら知らない。遺言とやらも、真偽が危ぶまれるのだが。三井にしてみれば、会社のオーナーの地位を承継した小松が、少なくとも敵対的に動かなければ社長としてやっていけない。そのためには、自分は社長の椅子に固執していない。本当なら坊ちゃん社長というポーズを取り続ける必要がある。そうしていれば、小松が就任を拒んでい

る以上、とりあえず安泰と踏んだわけだが、そんな画策を田嶋に知られてしまった。そうなれば、有限であることを小松に告げなければ信を失う。今回の流れはそんなところだろう。小松は、目の前で必死に言葉を繋いでいる三井の脂ぎつた禿げ頭を、心底汚いと思った。

田嶋はと見れば、目を閉じ腕組みをして、微動だにしない。彼もまた、三井の本音を読み取って、その腐臭に耐えているのだろう。

女将、わるいけど次の間の窓を開けて、爽やかな風をいれてくれる？ 少し臭いが気になる」

田嶋がクワツと目を見開いた。

すみません、少し前まではそんなに気にならなかったんですけどね」と女将が、慌(あわ)てたふりをして行動に出る。

小松は女将の言い回しの妙に感じ入って、思わずニヤリとした。

何をしていたんだね、女将。悪臭の原もとぐらい事前に見つけて処理をしておかんか！」と三井が怒鳴る。

その通りだと小松は、三井の顔を見ながら、自分自身を心の中で叱った。

夜中の十二時を回った。

女将が一日の全ての作業を終え、目の前にいる。今度の着物は寛くつろぐには恰好の、涼やかな柄だ。もつとも何を抽象化したものかは定かではない。

結局お二人とも泊まらずにお帰りになつたんですね」すみません。用意してくださった部屋の代金は、僕が支払いますので……」

いやですよお、そういうことではなくて。オーナーの坊ちゃんが指定した宿を、ふつう袖にはできませんでしょう。お二人とも気骨がおありだと、そんなふうに……」

「氣骨ねえ」と、小松は、女将の酌を受けながら、含み笑いをした。

「三井が帰るのは判つていましたから、田嶋を救うために僕が怒つた振りをして、二人とも叩き出したんです。田嶋は、自分だけが泊まつてぼくにヨイショしたと、三井に邪推されるなんて、耐えられないでしょうから」

「やつぱり、坊ちゃんは大きいわ。社長は坊ちゃん、その次の社長候補が専務の田嶋さん、ほんとはこれが一番なんですけどねえ」

「つしよにいかがですか」と小松は徳利を手にした。

「いんですか」と微笑んで小松の酌を受けた女将が、含み笑いをして言った。

「坊ちゃん、三井さんが社長の椅子に座つていたつてこと、本当に「存知なかつたんですか」

「親父が死んだ直後に、たくさん判を捺おしてるから、たぶんその中に紛れて、それを合法化する書類があつたかも」

「あきれた……じゃ、どれだけの株式を相続したのかもっ」

「おふくろは死んでるし、子どもは僕だけだから、全部

くることは知つてたけど、数字的なことは何にも確認してないんだ、いまだに」

「天然記念物クラスの人、ですね」

「二人は同時に弾けて、笑い出した。

「ところで三井さんの処分はお考えなんですか？ あ、いえ、差し支えなければ……」

「二人の人物像、女将の目にも結論としてそう映りましたか。でも、処分なんてしません。彼はなんだかんだ言うても、親父と一緒に汗と油に塗まみれて会社を築き上げた、言わば親父の戦友なんです。処分しなければならぬのは、むしろ僕自身、それと僕自身の持つている株でしょう。相続した株が、どんな力を持つているかも知らずにいたなんて、会社にとつてこれほど迷惑な社長はいない」

「でも、売れば、お父様の会社を人手に渡すことになりませぬ」

「それが一番悩ましいところですよ」

「女将がふつと肩を落として、話はそこで途切れた。

「女将、一緒に潮騒を聞きませんか」

「数分の沈黙の後で、小松は笑顔を作つて窓辺に向つた。

濃い灰色の水平線の上部に黄橙色の帯があり、その上には薄紫色の雲がいる。帯の真ん中が異様なまでに輝きだしたかと思うと、朱色をした大型の太陽が、ゆつくりと顔を出した。それまで近い空に溶け込んで見えなかった淡い雲たちが、一斉にその姿を現す。数羽の海鳥のシルエットが沖の方で踊っている。海が昇る太陽を引きとめ、朝陽の下部が伸びきって丸みが崩れた。それも数分、二人の關係はあつけなく裂けた。

小松は、やや肌寒さを感じさせざる早朝の潮風の中で、波子のことを想っていた。

なぜ波子なのかは分からない。世間で言う癪(ごぶ)付き、しかも、女将によれば、もう若いとは言えない二十三の女だ。癪、つまり子どもの海人は羸弱(れいじやく)で手がかかし、ようやく分かつてきたのだが、ピリアな分、少々知恵遅れの感じもする。さらに、女だてらに粗野(そや)な言葉も遣う。たぶん高学歴ではない。特に教養があるとか、高尚(こうしよう)な趣味があるとか、高いポテンシャルをもっているとか……それも無い。いや、無い

と思う。すこぶるつきの美人かといえは、好みによるが、一般的な見方では、違う。しかも長年漁(り)をしてきて身体もガタガタになつているに違いない高齡の祖父がいる。介護の費用や徘徊(はいかい)の対策もすぐに必要になるはずだ。少なくとも結婚すれば、彼もまた扶養の対象になるのだ。それだけの資力と覚悟が自分にあるのか。まずはそれだと思つう。

波子の「からだ」がほしいのか、と小松はさらに自分に問う。もつと言えは、女に飢えているのか、とも。即座に「まさか」との答えが返つてきた。東京の某所に行けば、肌と肌の間にお金が挟まる關係の女は何人かいる。一夜十萬。一人の例外も無く容姿端麗(ようさたんれい)で人柄もいいのだ。顔を見せるだけで、誘いもしないのに何人もそうした女が寄つてくる。だが、彼女たちが欲しいのは小松という男の体でも心でもない。金だ。それが哀しかった。

好きという感情には理屈(りくつ)はいらぬ。好きになつた波子に、死に別れた夫(むこ)がいて、一粒種の海人がいて、高齡の祖父がいる。それだけのことだと、小松は、立ち上がった。

防波堤の上から見ている太陽は、もう赤くはない。小

さくとなつて、光り輝いている。

それにしても、と小松は思う。「おのね」の女将は何故、波子との間が進展するよう図るのだろうか。不思議といえは不思議だ。出合いの場となつた病院での彼女の激怒から推して、女将と波子に特別な関係があるとは思えないのだが……。

おながが小さくグウと鳴いた。

海人の髪が揺れている。

小松はその後ろを、少しだけ興奮しながら追つていった。

いつものハーバーで海人は、小松が「どこに行くの」と聞くと、「はいちゃん」とだけ言つて笑顔を作り、歩き出したのだ。

波子の祖父に会う。海人は「はいちゃん」と呼んでいるが、彼にとつては曾祖父にあたる。

海人は、今度もまた胸を張つて、案内をしていく。

老人は新しく出来つつある海の公園の突き当たりで、「碑(いしぶみ)と見紛(みまご)う硬さで立っていた。寝起き

のままなのか、真つ白な髪が四方に飛び跳ねている。

つれてきたよ」

海人の言葉に老人はゆつくりと振り返つた。

海はあくまでも碧(あおく)、降り注ぐ日差しは行むたはずむ二人に、温かさとして短い影をくれている。

小松です」

それに付け加えるべき波子との人間関係はまだ出来ていない。

波子の祖父です」

彼もまた、私に関して同じことを思ったらしい。挨拶が丸太ん棒のまま返ってきた。

「たとすれば、なぜ自分に会おうとしたのだろうか。自分もまた、なぜ来たのだろうか」

小松は小さく首を傾げた。

波子や海人に構わんでほしい。このとおり……」

老人は天辺の頭皮が透けて見えるほどに深く、頭を下げて、唐突に言った。

「老人、待つてください。どうか頭を……」

磯吉といいます」と顔を上げた。両の目の端に目脂めやじがあつた。

私は娘さんやこのお孫さんが好きだから、おつきあいをさせてもらっているだけで」

それが分かるからお願ひしている。あなたはせつかく穏やかになった海を、波立てて、荒れさせて、素知らぬ顔で去っていく風に過さん」

「やそれは」

黙って聞かんかい」と老人は、突然癩癩(かんしゃく)を起した。

海人が驚いて、老人の腹を小さな手でぶつた。好きなおじさんをいじめるな、とでもいうように。

絵をかいてるだけで、生活してるそうだな。そんな鈍(なまこ)らな考えで、近つかれては困るんだ。年は食ってるが、まっとうな仕事をしている男に、後妻として嫁がせる話が進んでる。迷惑なんだ、正直」

老人の目が、敵意も露(あらわ)な威圧(ゐあつ)に変わっていくのが分かった。

波子さんは、あなたのために、あなたの余生のために、再婚させられるんですか」

小松も穏やかな会話の軌道を、あえて外した。  
「あなたに何がわかる」

あなたこそ波子さんが解かつていない。波子さんを侮辱していることに気づかないんですか」

たぶらかす目的だけのあなたに言われたくはない」

また自分の娘を貶(おとし)めた。彼女はたぶらかされるような愚かな女性じゃない。そんなことも解からないんですか」

あれは淫乱(いんらん)なんなんだ。まだ、後家になって日も浅(あ)いのに」

バカですね、あなたは。いま、ご自分で後妻に出す話をしていましたよね、後家になってまだ日も浅(あ)いのに。充分矛盾(むじやく)していますよ。孫(まご)を淫乱(いんらん)と評(ひょう)するのも下品(げひん)だ」

後悔(こうかい)はしない。小松は心底(こころぞこ)そう思った。

波子と海人が生活(せいかつ)できること、それが一番(いちばん)なんだ。そうできない男(おとこ)は引(ひ)つ込んで、ちよっかい出すんじゃない」

「おいちゃん、やだ、やだ、やだ……」

老人の語氣(ごき)の強(つよ)さにもめげず、海人は、祖父の脚(あし)に組み付けて抗議(こうぎ)を続けている。

小松は海人に「友情(ゆうじやく)」にも似た想(おも)いを感じた。  
「承知(ちやうち)しました」



老人が、言い募るべき言葉を呑みこむのが分かった。

生活力があればいいが、無いなら引つ込めというのだから、小松は、二人を扶養する財力があることを証明すればいいことになる。造作も無いことだと思つた。

解かればいい」

老人は海人の頭を撫でた後で、ホーツと溜息をついた。

磯吉の言うその男性と結婚したくないのよ、波子さんは。間違いないわ」

女将は、一人合点で頷(うなず)いた。そして、杓文字(しやくもじ)をやもじを聖徳太子よろしく手にしたまま、さらに続ける。

だから、波子さんは、好きな人がいると、坊ちゃんの存在を磯吉に伝えた。縁談は断つてほしいってね」

出来すぎた、ご都合解釈じゃないの、女将」

いいえ、噂に聞く頑固(くわんこ)もんで出無精(でぶしょう)の磯吉が、わざわざ出てきての強談判(ごわだんぱん)でしょう。

波子さんの坊ちゃんへの想いの強さに、磯吉が不安を感じた……それ以外に考えられないわ」

確かに、ご飯どきの気軽な話で波子が自分のことを持

ち出すとは思えない。小松は、やつと手渡してもらえたご飯茶碗をお膳(ごぜん)に下ろすと、フツと笑つた。あの老人が結果的にキューピッドになるかも、と。

ところで女将」

はい？」

その磯吉が……この名前、何とも呼び捨てにしやすい」

そういえば」と女将がクスツと笑つた。

波子さんのことを淫乱(淫乱)と言つたんだ。その場で口を極めて磯吉を責めはしたものの妙に気になつてね。何か知つていたら、教えてくれますか？」

女将の顔が瞬時にして曇(くも)つた。

これは、坊ちゃんが……」

秘密は守ります」

いえ、信じるかどうかは、聞いたその人次第(しだい)で話なんですから」

小松は、味噌汁の椀(わん)を手にして次の言葉を待たした。

以前お話した、海で死んだ夫、あ、総司(そうじ)そつじつて名前なんですけどね。その総司の父親の幸造(きんぞう)とできていたつて噂(うわさ)がたちましてね、今から五、六年ほど前に」

まさかあ」

ええ、わたしは当時も信じませんでしたけど、浜ではけっこう真まことしやかに。ただ…幸造が、つまり舅（しゅうと）が、波子さんをレイプしたのではと、そっちの方なら、可能性はあります」

で、その舅とは、いまも同居？」

いえ、総司が死ぬ一年前に、やっぱり海の事故で命を落としてます」

小松は、驚いて生じた喉の渴きを癒（い）やすように、味噌汁を啜（すす）り、ゴクンと音を立てて嚙下（えんか）した。

その噂、当の総司さんは知ってたの？ たとえば誰かが噂の存在を報らせたとか」

報らせたりしたら、その人が殴られて半殺しの目にあつたでしょう。少なくとも総司の性格を知っていたら、絶対言わないでしょうね。波子さんにベタ惚（ぼ）れでしたし」

惚（ぼ）れていても、女遊びはしてた…」

ええ、女好きは父親譲りでしたから」

凄い話があるんだね、こんな静かな集落に」

小松は腕組みをして、小さく唸（うな）つた。

『おのね』に来てから何日になるだろう。一日二万円、一月で六十万円。定宿と言っても、頻繁に利用するようになったのは最近のことだが、その使用料は、毎月小松忠興名義の預金口座から落とされている。考えてみれば、温泉と磯の香りが売りの、家政婦つき貸賃マンションのようなものだ。小松にはそれが、大層な贅沢（ぜいたく）だという感覚が無い。

小松が描いた絵は、東京のギャラリーで個展を開くたびに、四、五作は売れる。価額はそれぞれの号数で異なるが、売上」の総額は毎回百万前後だ。むろんそれだけで食えるわけはなく、収入乃至財産としては、それに父忠興が生きていた頃は定期的な仕送りが加わり、忠興の死後は莫大な、と言つていい遺産が加わっている。いずれにせよ、女将の言うところの『おちゃん』には違いない。普通なら親の庇護、援助で暮らしていれば、どこか忸怩（じくじ）たるものがあるはずなのだが、それが無いところ、あつたとしても周囲にそれを感じさせないところが、生来の『夫きさ』と言えるかもしれない。

小松は、何回か波子を抱く夢をみた。その中でも忘れられない『作品』がある。

どこの海かは分からない。微粒状の空気が、射し込む日光の力を借りて、活き活きと上下左右に踊っている。その群れの向こうから、波子が全裸で泳いでくる。酸素ボンベもないのに息苦しそうな様子が無いばかりか、微笑んでいるようにも見える。主人公らしい「私」も、どんどん彼女の方へと寄つていく。波子が海水の中で真つ直ぐに立った。別の生き物のように揺らめく長い髪、「私」への言葉が全て泡となつて昇つていく。広い額(ひたい)と濃い眉毛だけがはつきりと分かる。白い乳房の小動(こゆる)ぎが「私」の中の男を誘う。自然に視線は下がり波子の女を捉(とら)える。引き締まつた下肢の根元に、密集して生えている恥毛という名の海藻。急に「私」の呼吸が乱れ、鼓動が極限まで高まる。海水が「私」の想いを受け取り、その波動を波子に伝える。苦しい。死に至る直前の悦楽がそこにはある。波子は肯(うなず)くと、穏やかな表情のまま、光の分子に支えられるようにして横たわつた。徐々に「私」の目の前で開かれる「女」。波子の股間に吸われて行く、キラキラとした微細な珠(たま)の群れに

載つて「私」は、ついに言葉を口にする。波子、ぼくは……海が一気に口腔を満たし、言葉はそこで塞(せ)せき止められる。狼狽した「私」の前に、波子の女陰を隠すようにして現われた海人の真つ青な顔——  
小松は、海水ならぬ寝汗で、ぐつしよりと濡れた自分を、独り床の上で見詰めたものだ。

とにかくもう一度波子に会うきっかけが欲しかった。もう女将の配慮には頼れない。それも事実だ。思春期の男の子が、好きな女の子に想いを伝えられないで困っている。そういう歳でも、レベルでもないのだ。

海の男のつもりでいた自分が、陸の船とも言える車、ランドクルーザーを買つた。運転免許はもちろん持つている。ハンドル捌きも並みのタクシー運転手程度にはいいはずだ。誰のための「宗旨替え」かは知っている。何のための車かも自分自身には見え見えでいい。小松は波子の祖父が言い放つた「攻撃」に拘(こ)わつていた。

ワイパーがメトロノームのように時を刻む。進行方向の右手に続く、滲(にじ)んだ灯の数々……真正面には岬に

向う幾筋もの光の破綻。左手には、潮騒が聞こえるだけで何一つ見えない、真つ黒い海が、その広さだけの空間が、居座っている。いくらアクセルを踏んでも、目的地に近づけるわけではない。波子の住所さえ知らないのだ。女将にも聞いた。知らなかった。あの辺り」という大まかなこと以外は……。

海から見た潮の香の町、海人と出会ったハーバー、その停泊港から『おのね』までの道。そのほかは初めての土地を訪れるのと大差が無い。本当に「知らない町」だった。国道を外れて、町の道に入るたびに「行き止まり」の立て札が現れ、車の体格の良さから苦戦のUターンを強（し）いられた。

『とにかく町中を走り回ろう』

波子や海人と遭遇する確率はゼロに近い。ましてや夜の八時なのだ。

小松は自分から東京に赴いて田嶋専務に会い、率直に聞いてみた。精密機械のことを何一つ知らない僕で、社長職が務まりますか」と。

田嶋の応えは、好意的且つ明快だった。

先代も旋盤せんばんはからきし駄目でしたよ。職工

なら技術は不可欠ですが、坊ちゃんに求められるのは専門知識や工作技術じゃなくて、器量です。社員をやる気にさせて人を纏めていく器の大きさです。かえって細々（こまこま）したことを知らないほうが、うちの会社の場合うまくいく。みんなで社長の面倒を見ようって言うてね。坊ちゃんがその気になったのなら、協力は惜しみません。いろいろ鍛（きた）えてさしあげます。それに、うちには他社に無い極め付きの特許がある。先代と私は開発したものなんです、これがある限り、うちの会社は揺るがない。坊ちゃんは大船に乗ったつもりで社長の椅子に坐（ま）っていればいいんです」

前回の『おのね』の自分の言動は、どうやら田嶋のめがねには適（あ）つたらしい。きつと叩き出す形を採った真意も、その場で察（さ）したろう。どっちが面接試験をしたのかな」と小松は、ハンドルを一つ叩き、声を出して笑った。

実際に十分な財力がある。しかしその事実だけでは世間は納得しない。それを誰の眼にも明らかな形で、示さなければならぬ。恐怖、危惧、期待、安心……全て心の中の動きだが、それらを誘発したり担保したりするのは、金、物、肉体などの具体的なものだ。小松は、老人の

「出現で改めてそのことを確認し、世俗的になる覚悟を迫られていた。

目の前の小さなヨツトが、ゆつたりとした動きで、ハーバーの波と遊んでいる。頭の真上にいる太陽が、小松の肩や背中を温めている。足元で、寄せてきた「波」が、小さくちやぶんと跳(は)ねた。

小松さん

女の声に振り向くと、海人を連れて山の美術館に出かけたあの日のままの波子が、立っていた。

笑顔で、ゆつくりと立ち上がった小松に波子は、あの美術館で、生意気なことを言ったシーンから先の方、やり直しちや、いけません？」と、真つ直ぐな目をして言った。

僕もそうしなかった・・・ずっと

小松は、学生がよくそうするように、握手を求めた。

手は嫌(いや)、恥ずかしいから

ひび割れて、ささくれて、タコさえ出来ているから。小

松には、そう聞(き)こえてくる。

だからこそ握り締めたんです」

小松は、優しく微笑んで促した。

あのとときの、中途半端な求愛の言葉を全部、貴女に言  
いなおしたい」

波子の瞳(まなこ)が潤(うる)みだした。

握った手から、熱いものが伝わってくる。

会(あ)いたかった、ほんとに・・・」

波子の頬(ほ)が、ためらいながらも小松の胸(むね)に触れた。

僕もこと小松は応(こた)えて、髪(かみ)を撫(な)でた。それが自然(しぜん)かどう

かは分からないが、ただ慰(なぐさ)めたいと、そう思った。意(い)に染

まない後(ご)妻(さい)の話(わたり)に日々悩(なや)まされていただろう波子を。

だって、何(なに)にも・・・、何(なに)にもわたしには無いんだもの」

同じだよ」

あるのは、父親(ちち)が汗(あせ)と知恵(ちえ)や蓄(たくわ)えた金(かね)だけだ。世間(よこ)が

どう思(おも)おうが、それは本来的(ほんらい)に自分の価値(かち)ではない。そ

う思(おも)っている。ただ、いまはそれを唯一(ただひとつ)の武器(ぶき)に、「相手(あいて)

の男(おとこ)と戦(たたか)わなければならないのだ。

「…海人(うみ)人は？」

ある目的(めい)的(てき)が、この問(と)いに結(むす)びついた。

おじいちゃんのこと」

波子が小松の背に回した手に力を入れて、言った。

「きょうは海人を忘れて。お願い」

小松も実はそうしなかった。

「ひまわり」のワンピースから抜け出た波子は、着衣のときのスラリとした印象とは違い、グラマラスだった。満ちるところは満ち、引くところは引き、繰り返し揺れる肌に滲み出る汗さえ、潮の香りがする。

『夢の中の波子とつながっている』

肢体はしなやかで、結ばれた部分を越えた両の足先は、小松の肩の近くで妖しげに揺れている。

「ゆらゆらと左右に動く顔。半ば開けた口が、吐息の間（はざま）に幾度となく洩らす言葉が、小松を別の世界へと誘い（ざな）つ。」

「離さないで……連れてって」

人の話からしか推測できないが、女遊びが好きだった亡夫総司への潜在的な嫌悪、自分をレイプした今は亡き舅幸造の恨み、老醜をさらして僅かな生活援助を期待し、強いて再婚を迫る祖父磯吉、素直だが病弱に過ぎる息子海人……さらには、自慰に頼らざるを得ない性欲の

処理。或る意味では女としての地獄が続いているのが、いま、抱えている波子だ。小松はそう思った。

「連れていくとも……きっと幸せにする」

小松は口移しの言葉で、自分が行くべき道についての、迷いを消した。

「自分なら、いや、自分だけが波子を救える』

それは確信に近くなった。なぜなら、海人がいるからだ。他の男にとつては、邪魔でしかないだろう。世間で言う「瘤」が、小松にとつては癒しなのだ。

「もう何も、分らない。……どう思われても、いい、あなたの傍がいい……」

波子が、小松の男を唾（くわ）きえては離す、その間は（ま）で、苦しうに言葉を繋（つ）なぐ。

「波子さん、いいんだ、そこまでしなくても」

「ううん、あなたの全てがほしいの」

唇から糸を引いて見上げた波子の、瞳が見る見るうちに濡れていく。

小松はその、涙の奥を見詰めているうちに、次第に本来の自分を見失っていくのが分かった。

え、私のために次の取締役会で、ですか。私が次期社長、  
そういうことですか」

電話の向こうで田嶋専務が、そう言った後で絶句した。  
息遣いで興奮しているのが分かった。

よく考えました。社長の椅子は包括承継の対象外です。  
預金や現金や株式とは違う。しかるべき方にお任せす  
るのが一番と、そういうことです。父もあなたに譲るな  
ら、泉下で微笑んでくれると思います」

本音だった。波子や海人の扶養のためにも、将来のため  
にも、事業の失敗は許されない。航海術も知らないズブ  
の素人が荒海に船出するような愚は、決して犯してはな  
らないのだ。

「井専務には、私から？」

「え、私からこの後すぐに電話で、さらに代表取締役  
に対する正式文書として、意向を伝え、早期の取締役会  
招集を求めます」

「決断は、本気なんですわね」

それは疑うという感しではなく、驚きの確認といった  
風だった。

いつも見ている海とは違う、真つ平らで漆黒の海が遙か  
彼方に広がり、その海を海と知らせるべく、まるでふち  
取りでもするように、大小の宝石にも似た灯が取り巻い  
ている。煌めきながら、囁きながら、その光の群れはさ  
らに丘へ、山へと登っている。大勢の人たちの生活が、そ  
のままキラキラと点滅しているのかもしれない。小松はそ  
う思った。

少し寒いわ」と波子が小松の腕にすがった。

「この眺望の素晴しさをくれたのは、風なんだね、きつと  
空気が澄み切ってる」

抱きしめた波子の体が確かに冷えていた。

展望台の突先にクルマを停めて獣のように交わった後の、  
極限まで火照った体には、車外の空気は真冬のそれだっ  
たろう。

小松は、景色を見よう」と誘った配慮の無さを、少し  
だけ悔いた。

そろそろ行きましょう」

大きく頷いた波子のおでこが、小松の胸に当たった。  
結婚してくれますか」

セックスの残り香でむせ返るような車内に戻ってすぐ、小松は決意を口にした。ルームランプが消えないように、意識的に半ドア状態にしている。

「はい」と波子が、小松の顔を見詰めて言った。

その後で頬に付いた前髪を、指先でゆつくりと退けてた。

「ありがとう」

「お礼つて、なんか変です」

その通りだと、小松も頭を掻いた。

挙式の準備とかあるので、半年後ぐらいになると思うけど」

会社の新体制作り、新居の建築、海人の教育プラン、磯吉の事前の始末、……始末」とは無礼な言葉だが、相手が金銭中心の考えなら、金で生活を保障し容喙を禁じるしか方法はない。小松は、これらのためには相当の株式換金措置が必要と踏んだのだ。その前提として、資産状態の確認もしなければならなかった。

「今すぐじゃ、なぜ、いけないんですか」

「口だけではなく、波子の目も抗議をしている。」

「きつと、優柔不断の先送り」と受け取ったのだろう。そ

うだとすれば、波子は絵本美術館のときそのまま小松」を、今また見詰めていることになる。

小松は縷々説明をしようとして止めた。この期に及んでの延期」が、自分自身をちびた存在にしてしまうと感じたのだ。

性癖なのかな、こんな大事なことで、完全に準備してから、なんて考えてしまつて。ごめん。すぐに婚姻届を出そう。そのほかの付帯的なことは、後でいい。それでいいよね、波子さん」

波子の瞳が漸く潤んでいくのが分かった。

「ごめんなさい。わがまま言つて。あなたが、いまこのときに結ばれなかつたら、あなたが、どこか遠くへ行つてしまふような気がして……」

大粒の涙が波子の頬を伝つていく。

「そうだ、同時に海人を養子にしよう。養子縁組、僕のごどもに。いいよね、当然賛成してくれるよね」

波子が手の甲で涙を拭うやいなや、首を振つた。

「それは駄目です。そこまで甘えられませんか」

「夫婦になるんだ。甘えは当たり前じゃないか。嫌々なんかじゃなくて、僕は海人が好きなんだ」



「いえ、ご好意だけで、…それだけはほしないで」

「そんな言い方、よせよ。変じゃないか」

きつと後悔するつて分かつていて、はいなんて言えませんがあなたはあの子のことを何も知らないから」

知らないつて何を。海と父親に少しばかりのトラウマがあるからつて、それが何なんだ。純真無垢な子だから、幼く見える、僕はそう思つてる」

ありがとう、そんな風に見てくれて。でもそういうことではないの。いまは言えないの。だけどとにかく」

波子の顔が俄かに紅潮し、涙が両の目から溢れ出した。それは波子の心に堆(うず)たかく積もつた暗い何かを、洗い流すような勢(いきほ)いだつた。

何をこたわつているのか、言つてくれないか。謎々してるときじゃないんだ。いま、結婚の話をしていて、早いほうが言いと君から言い出したんだよ」

小松は少し苛(いら)立つた。

養子にすることとは、たとえば私がいなくなつたとしても、死んだとしても、親であり続けるつてことですよ」

当たり前じゃないか、喩(たと)へは縁起でもないけれど、それが親子だつて」

ありがとう…。だからなの」

何か病気を抱えているのかもしれない。小松はそこに波子の涙の源を感じ取つた。

あの、病院の先生に聞(き)こう」

俯(うつむ)いた波子の髪を撫(な)でながら、そう思つた。